

# 北海道の「俊寛」

小林多喜二

青空文庫



十一月の半ば過ぎると、もう北海道には雪が降る。（私は北海道にいる。）乾いた、細かい、ギリギリと寒い雪だ。——チャツプリンゴールド・ラッシュの「黄金狂時代」を見た人は、あのアラスカの大吹雪を思い出すことが出来る、あれとそのまゝが北海道の冬である。北海道へ「出稼」に来た人達は冬になると、「内地」の正月に間に合うように帰つて行く。しかし帰ろうにも、帰れない人達は、北海道で「越年（おつねん）」しなればならなくなるわけである。冬になると、北海道の奥地にいる労働者は島流しにされた俊寛のように、せめて内地の陸の見えるところへまでゞも行きたいと、海のある小樽、函館へ出てくるのだ。もう一度チャツプリンを引

き合いに出すが、「黄金狂」で、チャップリンは片方の靴を燃やしてしまつたので、藁か布切れかでトテモ大ツかく足を包んでいた。今いうその出てくる者達が、どれもそれとそつくり同じ「足」をしているのだ。

夏の間彼等は棒頭にたゞきのめされながら「北海道拓殖のために！」山を崩した。熊のいる原始林を伐り開いて鉄道を敷設した。——だが、雪が降ると、それ等の仕事が出来なくなる。彼等は用がなくなるのだ。そうになると、汽車賃もくれないで、オツぽり出される。小樽や函館へ出てくるのはこういう人達なのだ。

雪の国の停車場は人の心を何か暗くする。中央にはストーヴがある。それには木の柵がまわされている。それを朝から来ていて、

終列車の出る頃まで、赤い帽子をかぶった駅員が何度追ッ払おうが、又すぐしがみついてくる「浮浪者」の群れがある。雪が足駄の齒の下で、ギユンギユンなり、硝子が花模様凍てつき、鉄物が指に吸いつくとき、彼等は真黒になつたメリヤスに半纏一枚しか着ていない。そして彼等の足は、あのチャツプリンの足なのだ。

——北海道の俊寛は海岸に一日中立つて、内地へ行く船を呼んでゐることは出来ない。寒いのだ！　しかし何故彼等は停車場へ行くのだ。ストーヴがあるからだ。——だが、そればかりではなくて、彼等は「青森」とか、「秋田」とか、「盛岡」とか——自分達の国の言葉をきゝたいのだ、自分ではしかし行けないところの。そしてまたそれだけの金を持つており、自由に切符が買えて、そ

こへ歸つて行く人達の顔を見たいからなのだ。——私は、その人達が改札を出たり、入つたりする人達を見ている不思議にも深い色をもつた眼差しを決して見落すことは出来ない。

これはしかしこれだけではない。冬近くなつて、奥地やまから続々と「俊寛」が流れ込んでくると、「友喰い」が始まるのだ。小樽や函館にいる自由労働者は、この俊寛達を敵かたきよりもひどくにめつける。冬になつて仕事が減る。そこへもつてきて、こやつらは、そうでなくても少ない分前を、更に横取りしようとする。この「友喰い」は労働者を雇わなければならぬ「資本家」を喜ばせる。——北海道の冬は暗いのだ。







# 青空文庫情報

底本：「日本随筆紀行第二巻 札幌―小樽―函館 北の街はリラ  
の香り」作品社

1986（昭和61）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「小林多喜二全集 第八巻」かすが書房

1958（昭和33）年6月

入力：向山きよみ

校正：noriko saito

2010年10月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 北海道の「俊寛」

小林多喜二

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>